

看護体験実習（早期体験実習）の実習指導について

竹村 真理¹⁾ 田中 深雪¹⁾ 日吉 恭則¹⁾
小林 美雪¹⁾ 小野寺 幸子¹⁾

Instructions for Early Nursing Practical Training

TAKEMURA Mari, TANAKA Miyuki, HIYOSHI Yasunori
KOBAYASHI Miyuki, ONODERA Sachiko

抄 録

早期看護体験実習（早期体験実習）において5人の専任教員が各々4箇所の幼稚園・保育園を担当し実習指導を行った。次年度の実習指導の検討のために学生の実習前後のレポートを内容分析したが、抽出したカテゴリーには特設施設間での相違がみられなかった。そこで先行文献に見られる早期体験実習の方法などと共に研究としての実習評価などについて検討した結果、実習課題レポート以外にも調査用紙を用いて学生の体験を明らかにする必要があることが明らかになった。

キーワード：早期体験実習
学習動機付け
対象者の理解、評価

1) 健康科学大学 看護学部 看護学科

はじめに

健康科学大学看護学部は、本年4月から教育活動を開始した。学生は、入学後初めて「看護とは」「看護の対象者とは」等を看護学概論で学んだ。本学部では、看護学概論が半分終わった段階の入学後1ヶ月余の学生に看護の対象者を「地域で生活する人」として今後の看護学の学習の動機付けとするために看護体験実習（早期体験実習）を実施した。看護の対象者はすべてのライフサイクルにある健康、不健康を問わず地域あるいは医療施設等で生活する人々であるため、実習先を病院、幼稚園・保育園、老年施設、地域で活躍する老人クラブに設定し、3日間をかけて各学生がこれらすべての実習場所で、1日ないし半日実習できるように配置した。我々5人の教員は、4つの幼稚園・保育園を各々担当し学生指導を行った。4幼稚園・保育園の教育・保育理念、教育・保育目標などは施設の規模や設置主体によって多少の違いがあり、学生の体験には違いがあるのではないかと推測した。我々は、各々の保育園での体験の違いによって学んだことに差異があればそれを補うために、実習指導を改善したいと考えた。実習終了時に行われた全体発表会でのグループ発表の内容から、学生は3日間の実習を通して、概ね看護体験実習の実習目標を達成しているようであったが保育園実習での具体的な体験は表現されなかった。また、実習終了後に提出されたレポートも、保育園実習での体験を強調するものではないため、保育園によっての学びや体験の相違や、指導内容を評価するのかがかりにはならなかった。そこで、次年度の実習指導の検討資料として4保育園での学びを明確にするために、事前学習・事後学習の記載内容の内容分析を行ったが、各保育園の学習成果レポートから抽出したカテゴリーに特段の相違はみられなかった。

以上のことから次年度の実習施設の異なる実習施設での実習指導の検討に向けて、早期体験実習関連の先行研究で報告されている実習の方法並びに実習評価方法について明らかにすることを目的とした。

【我が国における早期体験実習導入の経緯について】

早期体験実習は1985年に早期臨床体験実習として医学教育において早期に医学生に学習への動機付けを与えることを目的として導入された。1995年（平成7年）に当時の文部省は「わが国の文教施策」として21世紀の医療者の育成について、医学教育等の改善・充実と医療技術者の養成について、医学・歯学・薬学教育に導入すべきカリキュラム改善・教育方法として推奨していることを示した。

看護教育においては、2001年（平成14年）厚生労働省の看護教育のあり方に関する検討会において、大学における看護実践能力の育成に向けた検討が行われ、臨地実習という教育形態が重要な意味を持つこと、条件が整えば早期の学年次から早期体験実習を組み込むことの必要性が報告され、看護教育においては早期体験実習を導入する体制が整いつつある現在である。しかし、早期体験実習は実習形態が確立していない現状がある。

研究方法

1. 医学中央雑誌2006年から2016年に「早期体験実習」で検索した結果104件ヒットした。さらに「看護学生」に限ったものから原著論文及び資料29件を分析対象にし、類似したものを整理した。
2. カリキュラムの中における位置づけ、実習時期、実習目的、実習方法、実習指導体制、実習評価方法、評価結果に分けた。

結果

1. 早期体験実習の位置づけ、時期、目的、方法について

早期体験実習の位置づけ、時期、目的、方法について、表1の様に3つに分類した。科目の位置づけとしてはほぼ基礎看護学に位置付けられているが、明記されていないものもあった。時期は医療活動の現場の見学を講義と結びつけてイメージすることと学習の動機づけのために1年次前期^{1)~3)}、あるいは学習したことの確認としている場合⁴⁾は、基礎看護学の講義が半ば終了の2年次に設定していた。

表1 早期体験実習（看護）の位置づけ・時期・目的・方法について

分類	科目の位置づけ	時期	目的	方法
1	基礎看護学	2年前期7～8月	看護活動を知る ①基礎看護学で学習した看護の知識・技術を用いて看護活動方法の実際と看護の役割を考える。②病院、外来、病棟という医療看護活動の場を理解する。	学生84名、1病棟3～4名
2	基礎看護学	1年5～7月並行して看護学原論を開講	①学習の初期において医療の現場を知り健康障害をもった人と直接かかわることを通して看護の役割機能について理解する②学習を通して今後の学習の動機づけとする。	①学内講義、病院実習 ②院内オリエンテーリング ③病棟では看護師のシャドウイング、外来では患者に同行、施設見学では医療廃棄物集荷所を見学
3	コミュニケーションの実習	1年前期	自分のコミュニケーションの特徴を知るためにプロセスレコードの使用を学ぶ。	毎週金曜日午後の実習 3日間で病院見学・外来見学を実施

2. 研究としての実習評価の方法・分析

実習の学びの評価には、表2の様に実習課題レポートを評価の対象にしたものとあらかじめ調査用紙を配布したものの2種類がみられた。実習課題レポートを評価の対象にした場合は、内容分析を用い、新たに実習の課題とは別に調査用紙を用いた場合は量的な分析が加えられていた。ほぼ1年次に実施している早期体験実習であるが、2年次に実施している大学⁵⁾では、看護技術の学習の進度によって実習中に看護行為のいくつかを実施することを実習の内容にしていた。

表2 研究としての実習評価の方法・分析

分類	研究目的	分析対象	調査ならびに分析方法	
1	経験から意味づけられた内容を明らかにする。	実習課題レポート	記述内容	・ Berelson の内容分析
2	・ 学生が関わった看護行為の明確化 ・ 学生の着眼点	課題レポート	テキストマイニングの手法を用い、文書内の語の出現頻度と語句の共起ねっどワークの描出を分析方法として用いた	テキストマイニング手法
3	実習評価と学生の学びを明らかにする。	A 質問紙調査 B 半構造的面接調査	調査A ①学習意欲：看護学生学習意欲尺度、項目分析②達成度の自己評価：Visual Anaolog Scale ③実習内容：自由記述 調査B ①「実習で一番印象の強かった場面」「基礎看護技術演習にて、実習が活かされているか」について質問し自由に語ってもらう。	・ 調査A：Spermanの順位相関係数を使用。 ・ 調査B：逐語録からテーマに関する記述を抽出し、類似したデータをテーマに整理する。
4	実習を通してどのような学びを得ているかを明らかにする。	質問紙調査	医療施設間における各質問項目の5つの選択肢の割合 各医療職に対する実習前後の理解度の変化 実習前後における医療職種間の理解度のさの検定 自由記載のキーワードに対して	・ χ^2 乗検定、Fisherの直接確率法 ・ 平均点と実習前後の変化率を求めた。 ・ Kruskal-Wallis検定 ・ あらかじめ決めたカテゴリ内でのキーワード数、内容の変化を分析

考 察

1. 早期体験実習（看護）の位置づけ、目的、方法

日本における看護学生を対象にした早期体験実習に関する研究は、平成10年以降報告され始めている。田中ら⁶⁾は、早期体験実習の学習効果を分析した研究を「早期体験実習の学習効果の要因」「自己評価と早期体験実習の学びの関連」「早期体験実習の意味化された経験」の3つに分類し、早期体験実習を主観的な体験機会として終わらせず、経験の中から学びを認識できるように促す教育的かかわりの必要性が指摘されていると述べている。また、「学生の自己評価と学習への積極性には関連性が認められていないことから、学生が早期体験実習から自己効力感が高まるような体験を得られたとしても主体的な学習につなげるためには教員及び臨床のスタッフによる教育的関わりが必要であると考えられる」と述べている。

早期体験実習は主に臨地での実習が多く、保健センターでの実習は散見されたが、本学部が行ったように学生一人ひとりが、健康不健康を問わず全ライフステージにおける看護の対象者の生活を体験・見学できるように場所を変えて設定した文献は探した範囲では見当たらなかった。また早川ら⁷⁾の早期体験実習の意義に関する文献検討の結果では、一般の病院施設での実習を通して「実習施設の構造・機能」「対象の生活の場」「看護の役割・看護の実際」「他職種との協働・連携」が学びとしてあげられていた。また「あらゆる発達段階・健康レベルにある対象および家族」「看護活動の場の広がり」の理解

は、保健センターを実習施設とし選択した大学の学生の学びとして著明にみられたことが報告されていた。さらに早期体験実習の学び・効果として「看護学生としての責任・態度」「今後の学習の動機づけ」「早期体験実習で感じた戸惑い・不安・緊張」の報告があった。しかし科目との位置づけ並びに実習施設間の学びの差に着目した研究の報告はなかった。

2. 研究としての実習評価の方法・分析

先行文献の分類を通じて、実習指導の課題を抽出するためには、実習の前後の学生の認識や意欲、実際に体験したことについての調査を行う必要があると考えた。

本学での保育園・幼稚園実習レポートは、実習前に「乳幼児にかかわる保育士に対するイメージ」「保育園・幼稚園にいる乳幼児の生活に対するイメージ」を書くものであった。学生は与えられた課題に従って記述しているが、実習前の記述がないものもあった。実習後に記述する実習レポートは、「保育士の機能と役割の実際はどのようであったか」「乳幼児の生活はどのようであったか」を学習成果として記載するものであった。学生は、現象を記載しているが、自分が感じ、考えたことの記述は少なく、実習前のイメージと関連した学生個人の変化を記載しているものではなかった。

分析方法の選択は、評価の目的によるが、内容分析で行った方が、体験の内容が具体的な事柄として整理できる。分析対象が実習レポートであったとしても、さらに施設間の体験の差異、学生の認識の変化を明確にするためにも改めて調査用紙を加えることで明らかにすることができると考えた。

本学部の早期体験実習の目的は、初めて病院や地域で生活する人々の中に学生が身を置き、共に時間を体験することで看護の対象者に関して学生自身が学ぶとともに、文部科学省（2002）の看護学教育の在り方検討会報告の中で述べられているように臨地実習の意義は、「臨地実習の場に卓越した看護職者のロールモデルがいることが学生に良い影響を与える」ためロールモデルに出会えることである。その一方で、看護師養成機関に自らの意思で入学していない学生にとっては、早期体験実習で感じた看護の大変さ・厳しさ・責任の重さを肯定的に受け止められずに学習意欲を減退させていることも想定⁸⁾される。各施設の学生の体験の中から、良い影響を受けたことと共に、学習意欲を減退させたりした体験を抽出することは、実習後の教育的関わりの手掛かりになり、また早期に対応することによって、早期体験実習の効果を十分に得ることができるのではないかと考える。

〈引用文献〉

- 1) 伊藤朗子, 中岡亜希子, 岡崎寿美子他: 早期体験実習の評価と学生の学びに関する基礎的検討. 千里金欄大学紀要. 2009
- 2) 川野道宏, 高橋由紀, 梶原祥子他: チーム医療学習を目的とした早期体験学習の学習効果と意義. 茨

- 3) 浅井直美：看護早期体験実習における学生の視点から見た学習体験. 桐生短期大学紀要. 第18号. 2007
- 4) 神庭順子, 松下延子, 藤生君江他：4年制看護基礎教育課程の1年次のふれあい実習の教育効果（1報）学生の評価を分析して. 岐阜医療科学大学紀要. 2号. 2008
- 5) 鈴木秀樹, 庄司幸恵, 板垣恵子他：看護学生の早期体験実習における課題レポートの分析 (1) テキストマイニングの手法を用いて. 東北文化学園大学看護学科紀要第4巻第1号. 2015
- 6) 田中聡美, 林圭子, 伊藤尚子他：看護学生の早期体験実習における経験の内容に関する基礎的検討正統的周辺参加論の援用から. 東北文化学院大学看護学科紀要第2号第1号. 2012
- 7) 早川真奈美, 古田雅俊, 中村恵子：早期体験実習の意義に関する文献検討. 中京学院大学看護学部紀要. 第6巻第1号2016
- 8) 浅井直美, 小林瑞枝, 荒井真紀子他：看護早期体験実習における学生の意味化した経験の構造. Kitakanto Med J. 57. 2007

Abstract

As a part of the early nursing practical training, five full-time teachers provided training instructions guidance at four kindergartens and nursery schools. They analyzed the content of reports written by students before and after the training to review the training instructions guidance for next fiscal year. As the result of analysis, there were no particular differences noted between the categories extracted in each facility. Therefore, we reviewed previous studies regarding the methods for early nursing practical training and investigated the evaluation methods for such training as a study. Results indicated a need for investigating students' experiences using questionnaires in addition to the written assignments.

Key words : early nursing practical training, motivation to learn, understanding of children, evaluation